

共学大女子学生との比較による
別学大女子学生の傾向分析

一橋大学経済学部 学士論文

2010年3月1日

学籍番号：2106198z

氏名：野崎 晶

ゼミナール指導教員：川口大司

目次

目次.....	0
1 はじめに.....	2
2 先行研究および本研究の意義.....	3
3 仮説.....	4
4 データ概要.....	6
5 分析手法.....	6
6 分析結果.....	7
6-1 大学への進学理由.....	7
6-2 大学での生活.....	13
6-3 卒業後の進路について.....	17
7 結論.....	19
<データ概要>.....	22
<表及びグラフ>.....	23
<回帰分析結果>.....	34

1 はじめに

1985年に男女雇用機会均等法が施行されてから、すでに20年余りが経つ。その間に企業の雇用状況は変わり、女性が男性と同じような職に就く機会が多く、多くの場所で与えられるようになった。労働市場において女性の存在は当たり前となり、積極的な女性活用を行う会社が徐々に増えてきた。

しかしいくら法整備が進み社会の流れが変化しても、実際に女性に働く意志がなければ意味はない。仕事をやめて主婦になる女性像はいまだにあらゆる場面で目にする。個々の家庭の事情はあるにせよ、女性の積極的活用と謳っている中で彼女たちの存在がある意味で障碍になっているようにも感じることもある。その点において、女子高等教育が大きな役割を担っているのではないだろうか。一般教養、専門的学問に加えて、大学で学ぶ女性学・ジェンダー論といった女性支援教育は結婚観や仕事感に大きく影響を与えるだろう。社会に出る前の高等教育は、重要な意義がある。

さて、女子が高等教育を受ける機会を広く獲得したのは戦後のことである。このときは女子大学が、女子に高等教育機会を提供するという大きな役割を担っていた。「女性は男性と同等に扱われる権利があること」、「同等に働く能力があること」などを教え、女子を感化させた。その結果、先進的な女性が数多く誕生し、男性社会へ進出して行った。その後も、女子の進学率は上がり、就職率、勤続年数もまた増加していき¹、女子大学が目指す理想の社会へ近づいていっている。現在では、女性は男性と同じように社会、経済を引っ張っていく存在である。

このように、戦後、女子大学は「女性の能力向上、社会進出」を目指し女子教育を支えるという大きな役割を担っていたが、現代社会においても女子大学は同じ役割を果たしているのだろうか。女子高校生は女子大学より四年制共学大学への進学を好む傾向にあり、女子大学の志願者は年々減ってきている²。生き残りをかけて学部の増設や共学化を行っている学校も少なくない。かつてのように、女子教育の中心を担っていた面影はなくなってきた。しかし、中には、何年たっても変わらず人気を得ている大学や、学部新設などの改革を行い学生の呼び戻しに努力している大学もある。

女子大学は変革の時期に来ている。今までの女子大学ではもはや存続できないであろう。では、実際に女子大学へ進学を希望する学生は、大学へ何を求めて進学しているのだろうか。彼女たちは何を理由に女子大学へ進学するのか。そもそも、女子大学へ進学する学生はどのような学生なのだろうか。大学での生活はどういう特徴があるのか。そして、それらの点は、共学大学に通う学生と比べてどういう違いがあるのか（もしくはないのか）。

¹ 平成19年度の女子の四年制大学・短期大学への進学率は52.5%、男子の進学率は55%。昭和50年の女子の進学率は32.9%、男子の進学率は43.6%。（総務省統計局「日本の統計2009」、第22章教育）

² たとえば、日本女子大学では、平成15年度の全志願者数は8873人であったが、6年後の平成21年度は6993人に落ち込んでいる。

本稿では、以上のことを中心に分析を行う。データの対象者が卒業生ではなく実際に在籍している大学生であるために、大学進学時と大学生生活時の分析が主であるが、就職決定の際の重視点についても分析を行っている。最終的な本稿の意義は、「女子大学」の存在意義を改めて考え、さらに意義を見出すことで、女性の一層の社会進出へつなげていくことである。女子への高等教育の充実によって、社会で活躍する女性を増やしていきたい。

2 先行研究および本研究の意義

本稿のように女子大学について実証分析を行ったものは数多くある。特に、個々の女子大学について個別に分析を行った論文が多い。三宅（2003）は、同志社女子大学の卒業生にアンケート調査・分析を行い女子大学の存在意義について論じている。また天野・耳塚・御船・中西・飯塚・寺崎（2001）は、お茶の水女子大学の卒業生・修了生を対象としてアンケート調査・分析を行い、性差意識や大学の将来像についてまとめている。いずれも一つの大学を対象とした調査であり、また卒業生を対象としている。

一方で、いくつかの大学を対象とした日本の論文は私が調べた限りではほとんどなく、牧野（1999）が本稿を書くにあたって有用な先行研究であったので以下で紹介する。

牧野（1999）では女子大学1校、共学大学3校を選定し、計4校の女子卒業生からランダムに調査対象を抽出し調査を行っている。調査内容は「在学中の大学生活への満足度」「出身大学卒業資格の有効性」「大学教育の効用感」「大学時代の友人の影響」「大学時代の教師の影響」「娘への母校進学期待」の6つの点である。

これらの6つの点からの分析結果のうち、共学と女子大学出身者の比較で注目すべき結果が出たものについてのみ簡潔に述べたい。まず、「在学中の大学生活への満足度」についてである。結果は、女子大学出身者の方が「授業やゼミ」「教員の指導」「教員との交流」の満足度が高く、共学大学出身者は「サークル・クラブ活動」の満足度が高いということであった。また「施設・設備」への満足度は共学大学の方が高かった。次に「出身大学卒業資格の有効性」についてである。これは就職における出身大学卒業資格の有効性について分析したものであるが、女子大学出身者の方が、卒業資格が就職に有利と回答した割合が多かった。そして3つ目が「大学教育の効用感」についてである。家庭生活・職業・社会的活動における大学教育の領域別効用を調べている。結果は、家庭生活のみで有意差があり、女子大学出身者の方が役立っていると評価する傾向にあった。そして4つ目が「大学時代の教師の影響」である。女子大学出身者の方が教師の影響を強く受けた人が多いという結果であった。最後に「娘への母校進学期待」については、女子大学出身者の方が若干拒否傾向が強いという結果であった。

このように牧野（1999）では、さまざまな観点から女子大学の学生と共学大学の学生を比較しており、非常に客観的な女子大学女子学生の傾向が表れている。特に「出身大学卒

業資格の有効性」「娘への母校進学期待」はとても興味深い。2 つとも非常に感覚的なテーマであるため、この論文のように直接質問をすることでしか傾向を調査できないからである。

このように先行研究で女子大学は多く取り上げられているのだが、アンケート調査をしたものが中心で計量分析まで行っている論文は少ない。さらに、対象とする大学が一つであることが多く、それぞれの大学固有の特徴が分析結果に表れてしまっている可能性が高い。牧野（1999）は、サンプルの標本数が多く、質問項目においても本稿を書くにあたって参考にすべき点が多いのだが、対象とする女子大学がひとつであるため、結果をそのまま女子大学の傾向とするのならば疑問が残る。

一方で本稿は、対象とする大学が多岐に渡っているため、より総合的な傾向を分析することができたのではないか。また単純な集計調査のみならず、計量分析を行って共学大学との比較を行っているため、より説得力のある結果が出たと言えるのではないだろうか。

3 仮説

先行研究や、参考文献、さらに実社会からの印象をもとに仮説を述べる。

<仮説 1> 大学進学に関する仮説

◆女子大学へ進む人の特徴

まず、女子大学へ進む人の特徴として別学女子は共学女子よりも、(1) 親との関係性が深い (2) リーダーシップ能力が低い、という仮説を立てる。(1) は、普段自分自身が周りから受ける印象を元にしてしている。女子大学に通う友人が、よく家族の話をしており親との距離が近い印象を受けたからである。(2) は、多くの女子大学の教育精神として共通する項目に「次世代のリーダーを作る」ということ（もしくはそのような意味のこと）が書かれていたことから仮説とした。女子大学の建学精神の中でも女性の社会進出を促進するための教育は、大学の売りであり女子大学の存在意義とも大きく関係しているだろう。リーダーシップをとるのが苦手な学生が、リーダーシップ能力が育成されるのを期待して進学するのではないか。

◆大学進学理由

大学へ進学する理由として、別学女子は共学女子よりも、資格取得や就職に有利になるので大学進学を希望する学生が多い、という仮説を立てる。これは、専門学校進学や就職という選択肢もある中、大学へ進学したのはどういう理由からか、ということである。そもそも女子大学進学者は、就職率のよさを売りにしている女子大学へ進むのだから、高校生の時点で資格取得など将来につながることに大きく重点を置いている可能性が高い。大学へ進学するのも就職といった将来プランを考えての選択ではないか、と考える。

次に、現大学へ進学した理由として、別学女子は共学女子よりも、(1) 親の影響（親の

勧め) (2) 女子大学というブランド意識 (3) 就職率の高さ (就職支援の手厚さ) といった理由から女子大学へ進学を希望する、という仮説を立てる。これは、なぜ今在学する大学へ進学をしたのかということである。男女間での教育上の差別はすでに解消されており、女子は男子と同じ大学へ通うことができる。そのような状況で共学大学ではなく女子大学をあえて選んで入学してきたということは、特別な理由があるからではないだろうか、と考える。その理由として以上の3つを挙げた。

<仮説2> 大学での生活に関する仮説

◆満足度

大学生生活の満足度として、まず一つ目に別学女子は共学女子よりも、授業内容や教員といった学習に関する大学満足度が高い、という仮説を立てる。三宅 (2003) や牧野 (1999) でも調査・分析されている。女子大学が少人数制であるため必然的に授業の内容が濃くなるのではないだろうか、と考える。

そして二つ目に、別学女子は共学女子よりも、勉学以外での大学生生活満足度が低い、という仮説を立てる。女子大学は少人数制であり課外活動も小規模となる傾向があり、また男性がいないことより、共学大女子と比べて満足度が低いのではないだろうか。

最後に、別学女子は共学女子よりも、就職支援に関する満足度が高い、という仮説を立てる。就職支援が手厚いのは女子大学の特徴である。実際の学生の満足度も高いのではないだろうか。

◆勉学意欲

勉学意欲に関して、別学女子は共学女子よりも、真面目であり授業に対する意欲が高い、という仮説を立てる。女子学生は男子学生よりも全般的に勉強にまじめに取り組む傾向がある³。よって、女子大学では、周りに女子しかいないため、より勉強に対する姿勢が積極的になるのではないだろうか。

<仮説3> 卒業後の進路に関する仮説

◆就職先を決定する際に重視すること

就職先を決定する際に重視することとして、別学女子は共学女子よりも、ブランド力のある会社 (有名な会社) であること、安定した会社 (大企業) であることを重視する、という仮説を立てる。これは、大学進学の原因として「女子大学としてのブランド意識」を挙げたことと関係しており、就職先についても世間の噂であったり、知名度を重視しているのではないかと考えた。

◆キャリア志向

キャリア志向としては、安定志向である、という仮説を立てる。女子大学の中には、国

³ 高校生の授業の受け方を性別で比べると女子の方が積極的に授業を受けていることがわかっている。(Benesse 教育研究開発センター「第4回学習基本調査・国内調査 高校生版」第2章 高校生の学習に関する意識・実態)

際的に活躍できる女性を育てる、という教育方針を挙げている大学もあるが、実際は花嫁学校としてのイメージが色濃く残っており、卒業生の進路もどちらかというと安定志向なのではないかと考える。

4 データ概要

女子大学を分析するにあたっては、まず女子大学へ通う学生のデータが大量に必要となる。女子大学でアンケート調査を行うことは不可能であったので、既存の統計データを用いて可能な限りで実証分析をすることとした。利用するデータは、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター (SSJDA) の公開データより、『進路選択の振り返り調査 2005』(ベネッセコーポレーション寄託) である。(p.27 参照)

5 分析手法

一般的な単純集計調査と回帰分析を行う。以下に流れを示す。

①データの修正

- ・統計データの質問項目の一つに「大学名」を記す項目があるので、共学大学を 0 女子大学を 1 としてダミー変数を作る。この時、共学化した女子大学の扱いについては、女子大学であった年にその大学の学生として在籍していたならば女子大学生とした(1として処理)。またデータ数を増やすために共学化したその年に入学した女子学生も女子大学生として扱うこととした。共学化してから 2 年目以降に入学した学生については共学大学の学生として扱った(0として処理)。

- ・欠損値を「.」に変換する。

②統計データを質問項目ごとに集計し、結果を表やグラフにする。

全体における割合 (%) について、母数は欠損値を除いたデータ数となっている。

③回帰分析を行い、計量経済学的な傾向を分析する。

- ・回帰分析では統計ソフトの `stata` を利用する。分析に関しては被説明変数が 2 値の質的変数の場合は `dprobit` 分析を、2 値以上の質的変数の場合は `oprobit` 分析を行う。

- ・回帰係数は特に断りがない限りは基本的に 5%水準で信頼性を調べている。しかし判断しづらい場合は 10%水準でも可能とした。

④考察・結論

データ集計結果と回帰分析から考察を行い結果の解釈を行う。

6 分析結果

基本情報

上で挙げた3つの論点について分析を行う前に、データの基本情報を紹介する。

まず有効回答数は6463人（回答率64.6%）で、そのうち女性が3625人、男性が2828人、不明が10人である。また女性の内訳は、共学女子が3220人、別学女子402人である。そして学年別の共学・別学女子の人数は（表0-1）である。1~4年生まで大きな人数の偏りがないので、分析にも支障はないと考える。次に、大学ランク別の人数を表したのが（グラフ0-2）である。サンプルデータを、別学共学で偏差値（63以上、58~62、53~57、52~48、47以下の5つのカテゴリー）によって分けグラフにした。これより、共学大学より別学大学（女子大学）のほうが偏差値が低い傾向にあることがわかる。さらに、文系理系の割合を集計したのが（グラフ0-3）である。別学のほうが文系の割合が大きいことが分かる。また、国立、公立、私立の割合を集計したのが（グラフ0-4）である。別学のほうが国立大学の割合が小さく、私立大学の割合が大きいことが分かる。

6-1 大学への進学理由

ここからは、仮説1~3に基づいて、(1) 大学への進学理由 (2) 大学での生活 (3) 卒業後の進路、という順番で仮説の検証を行っていく。まずは、「女子大学へどのような学生が入学するのか」、そして「どのような理由で入学したのか」について分析を行う。

これ以降の流れとしては、まず、アンケート調査に一般的な単純データ集計を行いグラフや表を用いて概要を把握し、結果を示す。次に、統計ソフトであるstataを利用し、dprobitまたはoprobit分析を行い本格的な仮説検証に取り組む。そして最後に、単純集計結果と計量分析結果から最終的な考察、結果の解釈を行う。

《どのような学生が入学をするのか》

- ・女子大学へ進学する人は親との関わりが深い
- ・女子大学へ進学する人はリーダーシップ能力が低い人である

という2つの仮説を検証するため「どのような学生が入学をするのか」について、データを用いて調査・分析する。

○単純データ集計

質問項目より①「小・中学生のころをふりかえって、お父さんやお母さんとのかかわりで次のようなことがありましたか。」②「進路をきめるとき、次の人への相談は参考にしま

したか」③「小・中学校を振り返って、あなた自身のことで次のようなことはあてはまりますか。」を利用する

①について集計した結果が(表 1-1)である。この結果より、まず 12 項目中 11 の項目で、別学女子の方が共学女子よりも「あった」と回答した割合が高いことがわかった。また、平均値においても 12 項目中 11 の項目で、別学女子の方が高い値を示した。中でも一番差があったのは「1 勉強を教えてもらうこと」であった。これら結果から、別学女子のほうが共学女子よりも親との関わりが強いということがわかる。

②について集計した結果が(表 1-2)である。別学女子は共学女子よりも家族の相談を参考にした割合が高いということがわかった。特に母親への相談を参考にした割合は、共学と別学で 7.1%の差が表れている。

③について集計した結果が(表 1-3)である。結果は、共学女子の方が「そうであった」と回答した割合が多く、平均値もそのような結果が出た。別学女子は共学女子よりも小・中学校のときクラスのリーダー格としての役割を担っていた割合が小さいということがわかった。

○回帰分析

◆統計分析するにあたって

分析手法：dprobit 分析

Model： $y = \alpha \text{ var1} + \beta \text{ var2} + \dots$

Dependent variable:女子大に進学したか共学大に進学したか (女子大：1、共学大：0)

Independent variable:大学進学前の親との関係性、性格

上で利用した①～③の質問について、Stata を使用し dprobit 分析を行った。結果が(表 1'-1)、(表 1'-2)、(表 1'-3)である。

まず(表 1'-1)は、①の親とのかかわりの程度を色々なテーマから調査したもの、について回帰分析した表である。まず多重回帰分析をした結果、親との関わりという項目の中で有意な回帰係数となったのが、「将来や進路について話す」であった。また単回帰を行った結果は、「勉強を教えてもらう」「夏休みの自由研究を一緒に手伝ってもらう」「勉強や成績について話す」「将来や進路について話す」の 4 つの項目でそれぞれ回帰係数が有意となった。

(表 1'-2)は、②の進路決定の参考度がどの程度だったかについて、①家族(父、母、きょうだい)のみで回帰分析したものと、②全ての項目を変数に入れて回帰分析した結果である。これより、「母親」「学校外の友達」「高校の先輩」の 3 つの係数が大きく、また 5%水準で有意となった。中でも、「母親」からの参考度は一番大きい。

さらに(表 1'-3)が③の「小・中学生のころ、クラスのリーダー格だった」という質問項目を利用し dprobit 分析したものである。結果、回帰係数は 5%水準では有意ではなかつ

たが、10%水準では有意であった。

○結論・考察

以上単純集計結果と回帰分析結果から、女子大学に進学をする人の特徴について、結論を述べていきたい。

まず、「女子大学へ進学する人は親との関わりが深い」という仮説についてであるが、集計結果の値および回帰分析の結果より、仮説は正しいということがわかった。特に、母親からの影響が強く、進路決定の際には父親やきょうだいよりも参考程度が高い。

これらのことから予想できるのは、別学女子の方が共学女子よりも母親との接触の時間が多いということではないだろうか。おそらく、①「小中学校のころをふりかえって、お父さんやお母さんとのかかわりで次のようなことがありましたか。」という質問で、差が示されたのも、父親との関わりが強いのではなく、母親との関わりが強いことを表しているのだと考えられる。母親との関わりが強い理由としては、「仲がよい」ことなどが考えられるが、むしろ別学女子の母親は「家にいる時間が多い」からではないだろうか。つまり、フルタイムの仕事をしていないので家にいる時間が長く子供との接触の時間も長くなるということである。

次に、「女子大学へ進学する人はリーダーシップ能力が低い」という仮説について考える。集計結果および dprobit 分析からは、別学女子は共学女子よりもリーダー格的存在ではなかったという結果が出た。これより、仮説は正しいことがわかった。ただ、その理由に関しては、色々と予測ができる。別学女子は「能力向上を期待して進学するのかもしれないし、または女子大学の理念とは関係なくそもそも女子大学へはリーダー格ではない女子が進学するのかもしれない。

《どのような理由で女子大学へ入学するのか》

ここでは、

・別学女子は共学女子よりも、資格取得や就職に有利になるので大学進学を希望する学生が多い

・女子大学へ進学する理由として (1) 親の影響 (親の勧め) (2) 女子大学というブランド意識 (3) 就職率の高さ (就職支援の手厚さ) が強く関係している

という大学進学理由の仮説を検証するため「なぜ女子大学へ進学したのか」について調査・分析する。

○単純データ集計

仮説の検証のため、①「進路をきめるとき、次の人への相談は参考にしましたか」②「あなたが大学へ進学した理由として、次のことはどれくらいあてはまりますか」③「現在通

っている大学や学部・学科に進学を決める時に重視したことは何ですか」④「③の質問で○をつけたものの中で、特に重視したことは何ですか」を利用する。

①の結果は(表 1-2)である。内容は前に書いたのと同じで、別学女子は共学女子よりも家族の相談を参考にした割合が高いということがわかった。

②の結果は(表 1-4)である。まず、あてはまる度合いの高い(割合の大きい順)に上から3つ並べると、共学別学ともに「5 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」「2 専門的な研究をしたいから」「3 幅広い教養を身につけたいから」であった。また、共学と別学で差がついた項目は4~7であり、中でも「5 将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」は5.6%と一番差が大きい。

③の結果は(表 1-5)である。まず、共学女子について、重視度の高い(割合の大きい)項目を上から3つ並べると、「3 専攻したい学問分野がある」「2 入試科目・選抜方法がある」「1 入試の難易度がある」であった。それに対して別学女子では「3 専攻したい学問分野がある」「11 自宅から通える」「17 資格・免許がとれる」となり、両者で違いがあることがわかった。また、共学女子と別学女子を比較したときに多くの項目で有意差が示された。特に10%以上差がある項目を挙げると「5 総合大学である」「6 伝統や知名度がある」「8 就職のための支援が充実している」「11 自宅から通える」「14 授業料が安い」であった。

④の結果は(表 1-6)である。割合の大きかった項目を上から3つ並べると、共学別学ともに「3 専攻したい学問分野がある」「17 資格・免許がとれる」「11 自宅から通える」であった。また、共学女子と別学女子を比較したときに大きな差が示された項目を上から3つあげると「8 就職のための支援が充実している」「14 授業料が安い」「5 総合大学である」であった。

○回帰分析

◆統計分析するにあたって

分析手法：dprobit 分析

Model： $y = \alpha \text{ var1} + \beta \text{ var2} + \dots$

Dependent variable：女子大に進学したか共学大に進学したか(女子大：1、共学大：0)

Independent variable：①~③の質問項目、理系か文系か

→高校の時に、希望する大学での専攻が理系か文系か、ということがわかる項目がなかった。よって、おそらく大きな違いはないだろうと考え、大学在学時の理系文系専攻を利用した。

ここでは、上で集計した①②③の3つの質問を利用し分析する。④に関して回帰分析を行わないのは、「特に重視したこと」と限定してしまうと、学生の大学進学理由がいくつもある場合に、結果に反映することができないからである。

①の結果は、(表 1'-2) である。結果内容は、前の節で示したとおりである。

②の結果は、(表 1'-4) である。ここでは、「文系か理系か」も関係してくると考え説明変数に入れた。表より、多重回帰の結果、「資格や免許を取得したいから」と「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」という項目において、回帰係数が大きくかつ 5%水準で有意となりまた値がマイナス（別学女子の方がその項目をより重視していることを意味する）となった。また、それぞれの項目について単回帰したところ、「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」と「すぐに社会に出るのが不安だから」という項目でも、有意な回帰係数を得た。

よって、別学女子の学生が共学女子と比べてより進学理由として重視していたのは「資格や免許を取得したいから」「将来の仕事に役立つ勉強がしたいから」であり、「すぐに社会に出るのが不安だから」という理由は、相対的に見たらあまり重要視しているわけではないが、それなりに重視しているということがわかる。

③の結果が、(表 1'-5) である。これより、回帰係数が大きくかつ 5%水準で有意となった項目が、「総合大学である」「伝統や知名度がある」「就職のための支援が充実している」「施設・設備が良い」「自宅から通える」「大都市にある」「授業料が安い」「資格免許が取れる」の 8 つであった。この中で、値がプラスであったもの（別学女子の方がその項目をより重視していることを意味する）を大きい順に並べると「就職のための支援が充実している」、「大都市にある」、「伝統や知名度がある」であった。

最後に、①親への相談の参考程度と③現大学へ進学するのに重視したことを合わせて進学理由を総合的に回帰分析した。その結果が(表 1'-6) である。この結果から、回帰係数が有意かつ値がプラスであったもの（別学女子のほうの方がより重視していた項目）を大きい順に並べると、「就職のための支援が充実している」「大都市にある」「伝統や知名度がある」「自宅から通える」「資格免許が取れる」となった。

○結論・考察

以上の結果より、進学理由について考察をする。

まず、大学進学理由に関して「別学女子は共学女子よりも、資格取得や就職に有利になるので大学進学を希望する学生が多い」という仮説を立てたが、これは②の(表 1-4) や(表 1'-4) より正しいことが示された。女子高生は、資格を持っていれば就職に有利と考えるので資格の取得を求めて大学へ進学をする。一方で大学側は就職率が上がるので、資格を取れるような学部学科を設置し学生を集める。女子大学が資格取得や就職率のよさを売りとしているのも納得がいく。これは女子大学の大きな特徴のひとつであり、学生を誘引する大きな役割を担っているのだろう。

次に、女子大学へ進学する理由として「(1) 親の影響（親の勧め）(2) 女子大学というブランド意識 (3) 就職率の高さ（就職支援の手厚さ）が強く関係している」という仮説をたてたが、これについて考える。

まず (1) 親の影響という点は、(表 1-2) および (表 1'-2) から仮説が正しいことが示さ

れた。ただし、「父親」からの影響は(表 1-2)では別学女子のほうが高いものの、(表 1'-2)を見るかぎりでは表れていない。よって、特に母親からの影響が別学女子に関しては強いということが言える。では、なぜ母親からの影響が大きいのであろうか。まずひとつは、先ほど「親との関わり」の節で述べたことと同じことであり、別学女子の母親は共学女子の母親と比べて家にいる時間が長く娘の相談を聞く機会が多いということではないだろうか。さらに、別学女子の母親のほうが共学女子の母親よりも教育熱心であるということも考えられる。

次に(2)女子大学というブランド意識という点は、(表 1-5)と(表 1'-5)の「伝統や知名度がある」より、仮説は正しいことが示された。ではなぜ、女子大学の学生が共学大学の学生よりもブランド意識を持っているのか。おそらく、今もなお残る女子大学としてのブランド意識を示しているのではないだろうか。かつて女子大学は、娘を持つ親が進学を強く勧める大学であった。女子大学へ行かせれば、箔が付き結婚市場で有利になる、また安定した会社の事務として雇ってもらい、そこで結婚相手を見つけられる。女子大学は一部のエリートがいく大学であった。そういう考えがあったころの親のイメージが子供世代にまで及んだのである。現に、今でさえ女子大学というと一種の固定観念を生む人も多いのではないかと思う。

そして(3)就職率の高さ(就職支援の手厚さ)であるが、(表 1-5)と(表 1'-5)の「就職のための支援が充実している」より、仮説が正しいことが示された。(表 1'-5)では一番回帰係数の値が大きい項目となっている。女子大学は、就職支援体制がしっかりしており、学生自身もその特徴に魅かれて入学してくるということである。ほとんどの女子大学のホームページで、就職率や就職先を載せており、大学の「売り」として学生集めの柱となっている。なので当然、実際の大学内の就職支援も手厚いのであろう。

また総合的に、女子大学への進学理由を調べたのが(表 1'-6)であるが、この結果より親の影響はそれほど大きくなく、「就職のための支援が充実している」といった学生自身の内面的な理由のほうが進学先決定に影響しているということがわかった。

6-2 大学での生活

以上が、大学進学に関する分析だった。次にここでは大学内での生活、また大学生活全般に関する、共学大学と女子大学の違いを分析していきたい。

《大学生活での満足度》

ここでは

- ・別学女子は共学女子よりも、授業内容や教員といった学習に関する大学満足度が高い。
- ・別学女子は共学女子よりも、勉強以外での大学生活満足度が低い。

という仮説の検証を行うため、女子大学に通う学生と共学大学に通う学生の大学生活の満足度を比較する。①「あなたは、現在通っている大学や学部・学科について満足していますか。」と②「入学前に得た大学に関する情報と実際の大学にギャップを感じることはありますか」の2つの質問を利用する。

○単純データ集計

①の満足度について集計した結果が(表 2-1)である。共学と別学とを比べて全体的に差が表れたのは、(B) 進路支援の体制についてと (D) 教員についてである。(B) (D) では、どの質問についても別学の方が満足度が高く、平均値も低くなっている。また、全ての質問の中で、共学と別学で大きな差が示されたのは、(E) の「1 クラブやサークルの充実度」であった。この質問については 17.5%もの差があった。

②のギャップについて集計した結果が(表 2-2)である。入学前と後でのギャップについては、別学女子の方がギャップを感じている割合が多く、平均値も別学女子の方が低くなった。

○回帰分析

これ以降の回帰分析では、「var1 : 女子大か共学大か」の係数を判断材料とする。

◆統計分析するにあたって

分析手法 : oprobit 分析

Model : $y = \alpha \text{ var1} + \beta \text{ var2} + \gamma \text{ var3} + \delta \text{ var4}$

Dependent variable : 満足度

Independent variable :

Var1 : 女子大か共学大か (女子大 1、共学大 0)

Var2 : 大学設置元 (国公立が 1、私立が 0)

Var3 : 大学のランク

Var4 : 文系か理系か

満足度に関する質問は「施設・設備について」「進路支援の体制について」「授業教育シ

システムについて」「教員について」「大学生活全般について」の 5 つのテーマに分かれており、それぞれについてさらに細かく質問項目が設定されているが、それら一つ一つを分析すると細かくなりすぎるため、今回の分析ではそれぞれのテーマについての“総合満足度”を被説明変数とした。

①の結果が(表 2'-1)である。回帰係数が 5%水準で有意となったのは「施設・設備について」「進路支援の体制について」「教員について」であった。その中でも、別学女子のほうが満足度が高い結果となったのが「進路支援の体制について」と「教員について」であった。

②の結果が(表 2'-1)である。係数は有意となった。別学女子のほうが共学女子よりもギャップを感じている割合が高いということがわかった。

○結論・考察

以上の結果より、大学生生活の満足度について考察を行う。

まず、仮説「別学女子の方が共学女子よりも授業内容や教員といった学習に関する大学満足度が高い」について考える。(表 2-1)と(表 2'-1)の「授業・教育システムについて」と「教員について」より、別学女子は共学女子よりも授業・教育システムについてはそれほど満足していないが教員については満足度が高いということがわかった。(表 2-1)より、一般教養科目の充実度が 10%近く低い。女子大学は少人数制の分授業の数も少ないということが言えるのではないだろうか。一方で、1つの授業あたりの学生の参加人数が少ないため教員との距離が近く、丁寧な指導がされていることが考えられる。仮説は一部正しいが一部は正しくないということが言える。

そして、ふたつめの仮説「勉強以外では大学生生活満足度が低い」に関してである。(表 2-1)と(表 2'-1)の「大学生活全般について」という項目を見ると、「クラブやサークルの充実度」については共学女子のほうが 17.5%も高いことがわかる。よって、別学女子のほうが勉強以外の大学生活にあまり満足していないということがわかり、仮説は正しいことが考えられる。しかし、(表 2-1)の総合や(表 2'-1)の結果を見るからには、大学生活そのものの満足度に関しては共学女子と変わらない。(表 2-1)の「2 友人関係」についても、共学と別学女子で差はない。男性がいないから、友人関係に満足できていないということはないようである。仮説は一概に正しいとは言えないようである。

最後に、「就職支援に関する満足度は高い」という仮説であるが、(表 2-1)と(表 2'-1)より、仮説が正しいことが示された。前の節で、就職支援の手厚さを理由に進学を希望する学生が多いという結果が出たが、今回の結果から現場において実際に手厚い支援が行われており、学生自身が非常に満足しているということがわかった。これより、女性の就職支援を積極的に行っているという点においては、女子大学には存在意義があるように感じる。共学大学では、女性だけ特に手厚く就職支援を行うということはない。

最後に、「大学に入る前と後でのギャップ」については、(表 2-2)では別学女子のほうが

ギャップを感じている割合が 7.0%高いという結果が表れ、(表 2-1) からも有意な係数が得られ、別学女子の方がギャップを感じているとういことがわかった。しかし、これについては何にギャップを感じているのか予想がつかないので、いろいろな質問項目との相関係数を求めてみた(別学女子のみ)。すると、「あなたは、現在通っている大学や学部・学科について満足していますか。」という質問テーマの中の「施設・設備について」「6 総合」と-35.13%、「授業・教育システムについて」「6 総合」と-32.48%、「大学生活全般について」「6 総合」と-30.48%の相関があることがわかった。ここから、ギャップを感じている人は、良い意味でギャップを感じているのではなく何かしら不満を感じており、それは特に大学の規模が小さいこと、選択できる講義数が少ないこと、大学の伝統や校風、などと関係していることがわかった。これらの点は、女子大学の欠点となっているようだ。

《普段の生活について》

次に、

別学女子は共学女子よりも、真面目であり授業に対する意欲が高い。

という仮説を検証するため、女子大学に通う学生と共学大学に通う学生の普段の大学生活についての違いを分析する。

○単純データ集計

質問項目より

- 「1 大学の授業は 1 週間のうちで何日くらいありますか。」
- 「2 授業がある日は、平均して何コマくらい出席していますか」
- 「3 すべての授業を平均すると、出席率は何%くらいになりますか」
- 「4 大学の授業以外で、1 週間に平均して何時間くらい勉強していますか」
- 「5 クラブやサークルの活動には、1 週間に平均して何日くらい参加していますか」
- 「6 アルバイトには、1 週間に平均して何日くらい行っていますか」

を利用する。

これらの質問項目を集計した結果が(グラフ 2-3)～(グラフ 2-8)と(表 2-9)である。まず大学の授業日数と 1 日あたりのコマ数、授業外勉強時間において、共学女子の方が別学女子よりも多いということがわかる。特に授業外勉強時間は平均値を見ても 0.2 ほど差がある。また、別学女子は共学女子と比べてクラブやサークル活動の参加時間が少なく、一方でアルバイトに行く日数が多いということがわかった。

○回帰分析

◆統計分析するにあたって

分析手法：oprobit 分析

Model : $y = \alpha \text{ var1} + \beta \text{ var2} + \gamma \text{ var3} + \delta \text{ var4}$

Dependent variable : 1~6 の質問項目

Independent variable :

Var1 : 女子大か共学大か (女子大 1、共学大 0)、大学設置元

Var2 : 大学設置元 (国公立が 1、私立が 0)

Var3 : 大学のランク

Var4 : 文系か理系か

結果が (表 2-2) である。5%水準で有意な回帰係数を得たのは「1 週間の授業日数」「1 週間のクラブ・サークル活動日数」であった。別学女子は共学女子と比べて授業日数が多く、1 週間のクラブ・サークル活動に参加する日数が少ないということがわかる。

○結論・考察

以上の結果より、「普段の生活について」の考察を行う。

まず「女子大学に通う学生は真面目であり授業に対する意欲が高い」という仮説について考える。(グラフ 2-3) ~ (グラフ 2-8) より、共学女子のほうがコマ数、勉強時間が多いという結果となった。しかし回帰分析をした結果、「1 週間の授業日数」については別学女子のほうが多いという結果が得られ、「1 日の出席コマ数」「授業の出席率」「1 週間の勉強時間」については、マイナスの係数を得たが有意ではなかった。これより、授業日数について別学女子は共学女子よりも多くより勉強しているように見えるが、どちらかということ共学女子のほうが真面目な傾向がある、ということが言える。よって仮説は正しいとは言えない。

6-3 卒業後の進路について

最後は、進路選択についての分析である。就職先を決める時に重視することについて、共学女子と別学女子とで比較をする。

《就職先を決める時に重視すること》

・別学女子は共学女子よりも、ブランド力のある会社（有名な会社）であること、安定した会社（大企業）であることを重視している。

・キャリア志向は安定志向である。

という仮説を検証する。

○単純データ集計

調査項目より「あなたは就職先を決める時、次のようなことをどの程度重視しますか」を利用する。

集計した結果が（表 3-1）である。この結果から、「2 学生時代に身につけた知識や技術が生かせること」「7 知名度がある会社であること」「9 人や社会の役に立つこと」の項目で、共学女子と別学女子との間で多少の差があった。その中でも「7 知名度がある会社であること」については一番大きな差が表れた。

○回帰分析

◆統計分析するにあたって

分析手法：oprobit 分析

Model : $y = \alpha \text{ var1} + \beta \text{ var2} + \gamma \text{ var3} + \delta \text{ var4}$

Dependent variable(y) : 就職先を決める時に重視する項目

Independent variable :

var1 : 「別学女子か共学女子か」－別学女子は 1 共学女子は 0 のダミー変数

var2 : 「大学設置元」－国公立は 1、私立は 0 としてダミー変数を作った。

var3 : 「大学のランク」－大学ランクという項目を利用。（グラフ 0-1 参照）

var4 : 「文系か理系か」－現在の文理区分という質問項目を利用。

Label は「1 文系」「2 どちらかという文系」「3 文系と理系の中間」「4 どちらかという文系」「5 理系」「6 どちらでもない」。このうち「6 どちらでもない」は欠損値として処理。

結果が（表 3'-1）～（表 3'-3）である。上の説明変数を全て入れて多重回帰分析したのが（表 3'-1）である。var1 だけを説明変数として単回帰分析したのが（表 3'-2）である。

回帰係数が有意であったのは「7 知名度がある会社であること」と「11 国際的に働けること」であった。だが、7 は単回帰でだけ有意で 11 は重回帰でだけ有意であるので多重共線性の可能性がある。そこで相関係数を求めたところ、「大学設置元」「文系か理系か」に

他変数との相関があったため、この変数を抜いて重回帰分析を行った。結果が（表 3'3）である。これより、「7 知名度がある会社であること」では優位となったが「11 国際的に働けること」については有意にならなかった。

○結論・考察

以上の結果より、仮説について考察を行う。

別学女子が就職先を決定する際に共学女子よりもより重視することは、「ブランド力のある会社（有名な会社）であること」、「安定した会社（大企業）であること」である、という仮説を立てた。ブランド力については、（表 3-1）「7 知名度のある会社であること」を見るに、44.3%とそれなりに高く、別学と共学で 4%ほど差があることがわかった。さらに回帰分析からも別学女子のほうが重視していることがわかった。ブランド力に関しては仮説が正しいということが言える。一方後者の仮説については（表 3-1）「8 安定していること」を見るに、値は大きくかなり重視しているが、別学と共学で差はほとんどない。さらに回帰分析からも、有意な結果は出なかった。よって、仮説は正しくないということがわかった。

ここで「知名度がある会社であること」とほかの質問項目との相関関係を調べたところ（別学女子だけで）、以前に進学理由のところでも扱った「伝統や知名度がある」との相関係数が 0.3483 となっており、正の相関関係があることがわかった。就職先決定だけに限らずに大学進学に関しても知名度を意識しているということは、そもそもブランド意識の強い人であるということが予想される。

また、キャリア志向については、「11 国際的に働けること」「将来、独立して事業ができること」の結果を参照する。結果、両方とも、回帰係数が有意でないので、仮説が正しいということはいえなかった。

7 結論

仮説が証明されたものについて、改めて以下にまとめる。

◆女子大学へ進む人の特徴

・親との関係性が深い。特に母親との関係が強い。

◆大学進学理由

・資格取得や就職に有利になるので大学進学を希望する学生が多い

・(1) 親の影響(親の勧め) (2) 女子大学というブランド意識 (3) 就職率の高さ(就職支援の手厚さ) といった理由から女子大学へ進学を希望する。

◆満足度

授業・教育システムについてはそれほど満足していないが、教員については満足度が高い
就職支援に関する満足度は高い

◆就職先を決定する際に重視すること

就職先としては知名度のある会社であることを重視する。

以上の結果はすべて共学女子と比較した際に、より、別学女子に傾向性があると考えられることである。この結果より、女子大学へ進学した学生は「就職率のよさ」「伝統や知名度」「自宅からの近さ」「大都市近郊にある」といったことを重視して進学していることがわかった。ではこれより女子大学について改めて考えたい。

「就職率のよさ」については、ほとんどの女子大学にあてはまる重視点であり、就職支援は非常に手厚いようである。たとえばお茶の水大学では、キャリア支援センターの Web ページがありさまざまなイベントの紹介を行っている。イベントの開催時期も早く、すでに 5 月には「就職活動の進め方」についてのオリエンテーションが開催されている。さらに、就職活動中の学生への支援だけでなく、内定者を対象としたフォローアップ講座も行われている。社会的性差別はほぼ解消されたと言われているが、実際、民間企業で働く女性は多くない。このように、女性に特化した就職支援を行うのは非常に意義のあることだと思われる。こういった点で女子大学の存在意義が感じられる。

また「伝統や知名度」は、おそらく親や祖父母の大学へのイメージが影響しているのではないかと考えられる。統計データの調査対象者の親世代は、女子が大学に行くのがまだ一般的ではなかった世代であり、女子高校生は就職か短大進学が普通であった。4 年制大学へ進学するのはごく限られたエリートだけで、進学先も女子大学が主であった。そのため女子大学は女子高校生が進む最高の進路であり、知名度は高かったのではないかと考えられる。この祖父母、親の女子大学イメージが子供にも影響を与えているのではないかと考えられる。

「自宅からの近さ」「大都市近郊にある」といった、通学面での利便性は確かに納得ができる。(表 4-1) を見るとわかるように、東京都にある大学の割合は、全私立国公立で 17.5% なのに対して女子大学では 28.6% である。共学大学のように規模が大きくなり、開講授業

も少ない女子大学は、通学のしやすさや立地条件のよさを売りにしているのであろう。

また他に、女子大学が共学大学をしのご点として、少人数制ということが言える。学生数が少ないことで教員も一人ひとりに丁寧な指導ができ、だからこそ学生自信も授業が理解しやすくなる。もちろん、大学での勉強とは受身で教えてもらうのではなく自分で考え抜くことだという意見もあるだろうが、単位を取り卒業証書を得るためにただ大学へ通う学生よりは有意義な学習ができているように感じる。

今後、女子大学が生き残っていくためには、以上のことを女子大学のセールスポイントとして掲げる必要があるだろう。

ただ、「伝統や知名度」についてはややひっかかる部分がある。社会的な女子大学イメージとその実状についてである。昭和30年代各女子大学は競って家政学科を新設し、女子大学が花嫁学校化した。このとき、「女子大学無用論」「女子学生亡国論」といった議論が世間をにぎわせた。女性は、「誰もが味わいえる、それほどの努力なしに味わえる男性依存の妻と母の座」（池田論『女子大学；女子学生の生き方』）に逆戻りしたのである。現在、これほどまでの女子大学イメージはないものの、女子大学に対するイメージ（偏見？）と女子大学が掲げる教育理念とが背反している点もある。池田緑氏は『女子大教員の異常な愛情』において次のように述べている。「近年の共学大への女性の進学増加によって、職業志向の女性は共学大に進学することが多くなり、その一方で社会的な言説において女子大には良妻賢母の表象がより限定的に、かつ強く求められているように思われる」。主婦という存在を否定するわけではない。価値観は一人ひとり違っており、何が幸福なのかは客観的に判断すべきではない。ただ、本誌のはじめにも述べたように、「主婦」という存在がフルタイムで働いている女性や長いキャリアを考えている学生の多少の足かせとなっているかもしれない。もしそうだとしたら、花嫁学校へと逆戻りしている可能性がある女子大学自体も同じように障碍を生み出しているのではないだろうか。

女子大学は、上で述べたような特徴に特化することで女子大学にしかできない役割というものを果たせるだろう。ただ、それと同時に、社会的言説や卒業後の学生の統計調査などから、常に大学の存在意義・役割を考えながら、女性の能力向上・社会進出を目指してほしい。

<参考文献>

- 池田緑 (2007) 「女性支援教育の課題探索：大妻女子大学調査から (1)」、『大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究』 16 巻 pp.13-30
- 池田緑 (2007) 「女性支援教育と高等教育システム：大妻女子大学調査から (2)」、『大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究』 16 巻 pp.31-48
- 池田緑 (2006) 「女子大教員の異常な愛情：また私は如何にして“教える”のを止めて戦場を愛するようになったか」、『大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究』 15 巻 pp. 39-61
- 牧野暢男 (1999) 「女子大学の将来展望に関する総合的調査研究」、『日本女子大学総合研究所紀要』 2 巻 pp.39-93
- 牧野暢男 (2000) 「女子大学の将来展望に関する一考察」、『人間研究』 36 巻 pp.5-13
- 竹田好 (2007) 講演報告：「日本における女子大学の役割について～神戸女学院大学を事例として～」、『女性学評論』 21 巻 pp.103-121
- 南憲治 (1988) 「女子大学生における性役割の認知」、『親和女子大学研究論叢』 21 巻 A15-A25
- 岡田典子 (2002) 「私立大学の建学精神の類型」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』 第三部 第 51 号 pp.27-36
- 天野正子 御船美智子 飯塚和子 耳塚寛明 中西祐子 寺崎里水 (2001) 「国立女子大学出身者のライフコース・性差意識・大学将来像」、『日本教育社会学会大会発表要旨集録』 53 巻 pp.234-239
- 『女子大学のエスノグラフィー—女子学生の意識と行動パターンに注目して—』 山田真紀
藤原直子 小川奈保子
- 湊晶子 (2002) 「女子大学の今日的使命」、『大学と学生』 452 巻 pp. 2-7
- 『女子大学の役割と課題』 後藤祥子

＜データ概要＞

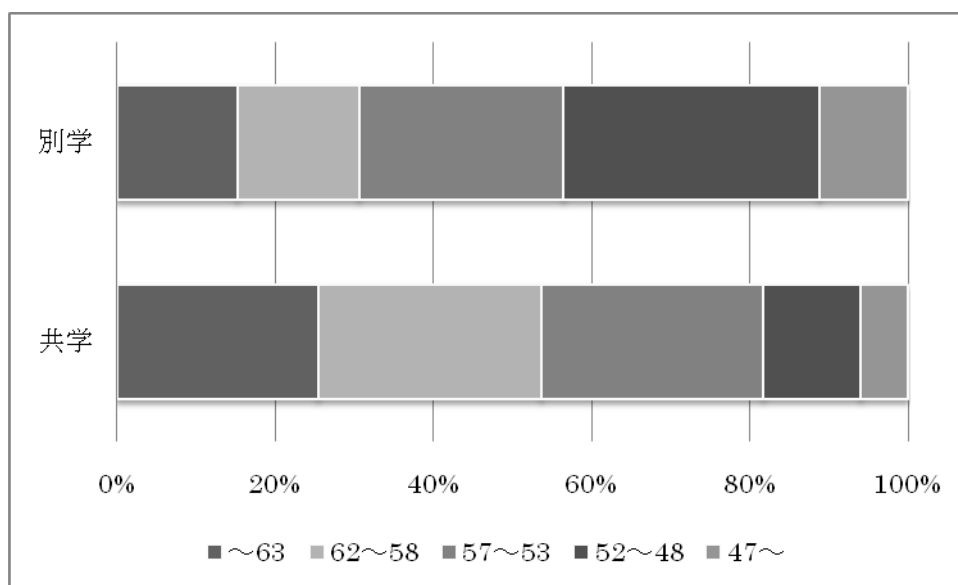
調査の概要	<p>本調査は、大学生を対象にして進路選択に関する振り返り調査を行うことにより、文系―理系、大学での専門領域、進学する大学の決定などの進路選択に影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的としている。とくに、理工系領域に進学した学生の進路形成や能力形成について詳細な分析を行うことで、同領域における高等教育段階までの人材育成の実態と課題を検討している。</p> <p>なお、本調査は、2004年度に経済産業省より委託を受けた『理工系人材の育成・確保に関する実態調査』の一環として実施されたものである。</p>
調査対象	全国の4年制大学に通う文系・理系の大学生男女
データ数	有効回答数 6,463人（配布数 10,000人，回収率 64.6%）
調査時点	2005年1～2月
調査地域	全国
標本抽出	<p>(株)ベネッセコーポレーションが所有する「進研ゼミ・ゼミレポーター（大学生）」の名簿から、全国の4年制大学に通う文系男子学生 2,500名，文系女子学生 2,500名，理系男子学生 2,500名，理系女子学生 2,500名，合計 10,000名を抽出した。</p> <p>* ゼミレポーターとは、ベネッセコーポレーション「進研ゼミ」の元会員を母体としており、大学等に進学する際に、後輩となる進研ゼミ会員のために、教材制作や各種情報サービスへの協力を申し出てくれた協力スタッフの組織で、全国で約 45,000名の大学生（大学院生も含む）が登録をしている。</p> <p>* ここで言う「文系」「理系」の区分けは、登録時に大学生本人が申告した大学の学部（学群，学類），学科（専攻，課程），コースをもとに、ベネッセコーポレーションで分類を行ったものであり、調査対象の抽出にのみ使用している。なお、本調査の分析で用いている「文系」「理系」の区分けは、今回の調査対象者に対して、「大学で専門としている学問領域は、文系・理系のいずれに該当すると思われますか」とたずねた結果をもとに行っている。</p>
調査方法	郵送法による自記式質問紙調査

<表及びグラフ>

(表 0-1 学年別人数)

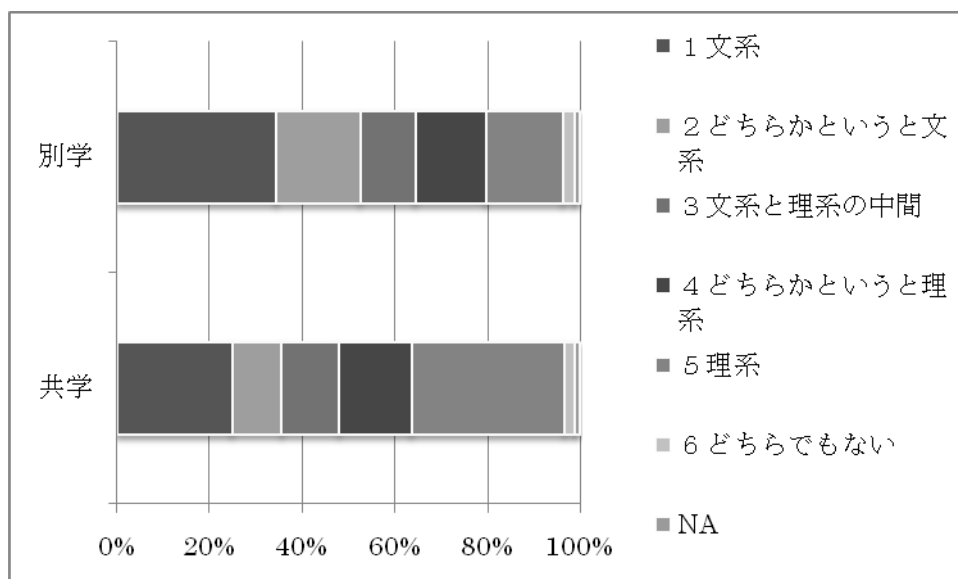
	1年	2年	3年	4年	不明	合計
共学	896	840	778	703	3	3220
別学	114	106	92	90	0	402
不明					3	3
						3625

(グラフ 0-2 大学ランク別人数)

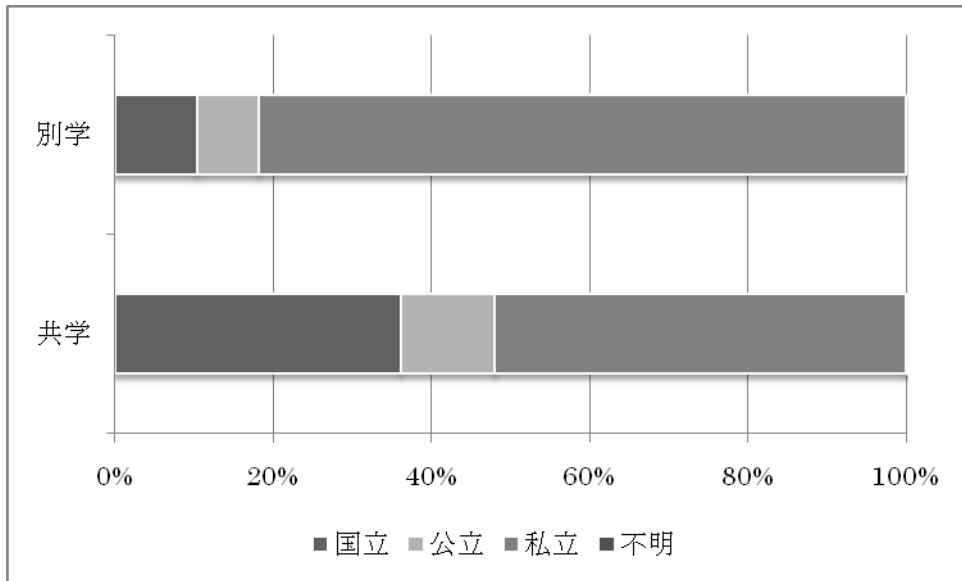


(グラフ 0-3 文系理系の割合)

Q「あなたが大学で専門としている学問の領域は、文系・理系のいずれに該当すると思われますか。」(学部・学科名にこだわらず、普段の学習・研究内容からお答えください。)



(グラフ 0-4 大学設置元)



(表 1-1 親との関わり)

Q「小・中学生のころをふりかえって、お父さんやお母さんとかかわりで次のようなことがありましたか。」1～12のそれぞれについて、あてはまる番号に○を付ける。

(注：1 よくあった 2 時々あった 3 あまりなかった 4 全然なかった)

	共学		別学		別学-共学	平均値		
	%	%	%	%		共学女子	大小	別学女子
1勉強を教えてもらうこと	64.4	72.0	-7.6	2.24	>	2.09		
2囲碁や将棋などを教えてもらうこと	18.6	19.5	-0.9	3.41	>	3.40		
3一緒に家の修理や日曜大工などの作業をすること	32.5	31.3	1.2	2.97	<	2.99		
4本や絵本を読んでもらうこと	67.2	72.0	-4.9	2.08	>	1.97		
5夏休みの自由研究と一緒にしたり、手伝ってもらったりしたこと	78.9	83.4	-4.4	1.83	>	1.68		
6キャンプなど野外で一緒に遊ぶこと	62.8	64.7	-1.8	2.21	>	2.17		
7親が働いている仕事場に行くこと	36.7	38.5	-1.9	2.90	>	2.88		
8学校での出来事について話すこと	92.9	94.5	-1.6	1.33	>	1.28		
9勉強や成績について話すこと	89.6	91.9	-2.4	1.50	>	1.40		
10将来や進路について話すこと	78.4	83.1	-4.6	1.84	>	1.67		
11友達について話すこと	91.0	91.2	-0.2	1.47	>	1.42		
12社会の出来事やニュースについて話すこと	72	74.3	-2.3	2.03	>	1.96		

(注1) 共学、別学の%は「1 よくあった」「2 時々あった」の合計の比率を示したものの

(注2) 別学-共学は、共学と別学の値の差を示したものの

(注3) 平均値については値が小さいほど親との関わりが強いことを表している

(表 1-2 進路決定の際の相談参考者)

Q「進路をきめるとき、次の人への相談は参考にしましたか」1～9のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつける。

(注：1 とても参考にした 2 やや参考にした 3 あまり参考にしなかった 4 ぜんぜん参考にしなかった 5 いない・相談しなかった)

	共学		別学		別学-共学	平均値		
	%	%	%	共学		大小	別学	
1父	47.8	51.0	-3.2	2.90	>	2.78		
2母	73.4	80.5	-7.1	2.12	>	1.96		
3きょうだい	18.9	21.2	-2.3	3.87	>	3.86		
4学校のともだち	59.7	61.0	-1.3	2.51	>	2.46		
5学校外のともだち	22.6	30.6	-8.0	3.61	>	3.40		
6部活などの先輩	22.3	21.2	1.1	3.83	<	3.85		
7高校の先生	73.8	69.6	4.2	2.08	<	2.16		
8塾や予備校の先生	28.2	29.6	-1.4	3.79	>	3.68		
9年長の知人	24.1	25.4	-1.3	3.94	>	3.90		

(注1) 共学、別学の%は「1 とても参考にした」「2 やや参考にした」の合計の比率を示したものの

(注2) 平均値については値が小さいほど「参考にした」ことを表している。

(表 1-3 小中学校の様子)

Q「小・中学校のころをふりかえって、あなた自身のことで次のようなことはあてはまりますか。」1～12のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつける。

(注：1 とてもそう 2 ややそう 3 あまりそうではない 4 ぜんぜんそうではない)

	共学女子	別学女子	別学-共学	平均値		
	%	%	%	共学女子	大小	別学女子
12クラスのリーダー格だった	40.0	34.9	5.1	2.72	<	2.82

(注1) 共学、別学の%は「1 とてもそう」「2 ややそう」の合計の比率を示したものの

(注2) 平均値については値が小さいほど「そうであった」ことを表している。

(表 1-4 大学進学理由)

Q「あなたが大学へ進学した理由として、次のことはどれくらいあてはまりますか」1～9のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつける。

(注：1 とてもあてはまる 2 ややあてはまる 3 あまりあてはまらない 4 ぜんぜんあてはまらない)

	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学女子	大小	別学女子
1大卒の学歴がほしいから	66.4	68.7	-2.3	2.19	>	2.15
2専門的な研究をしたいから	79.4	77.9	1.5	1.83	<	1.86
3幅広い教養を身につけたいから	76.6	77.1	-0.5	1.90	>	1.88
4資格や免許を取得したいから	71.6	75.6	-4.0	1.85	>	1.76
5将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	89.2	83.6	5.6	1.47	<	1.61
6自由な時間を得たいから	38.4	42.9	-4.5	2.74	>	2.67
7すぐに社会に出るのが不安だから	53.5	58.0	-4.5	2.52	>	2.39
8先生や家族が勧めるから	36.0	37.1	-1.1	2.89	>	2.84
9周囲の人がみな行くから	39.9	39.9	0.0	2.84	>	2.81

(注1) 共学、別学の%は「1 とてもあてはまる」「2 ややあてはまる」の合計の比率を示したものの

(注2) 平均値については値が小さいほど「あてはまる」ことを表している。

(表 1-5 現在の進路を決める際に重視したこと)

Q「現在通っている大学や学部・学科に進学を決める時に重視したことは何ですか」
1~17 の中であてはまる番号すべてに○をつける。

	共学女子	別学女子	共学-別学
	%	%	%
1入試の難易度があっている	56.7	52.0	4.7
2入試科目・選抜方法があっている	61.2	57.0	4.2
3専攻したい学問分野がある	84.2	84.6	-0.4
4有名な教員、優秀な教員がいる。	8.8	7.2	1.6
5総合大学である	26.1	3.7	22.4
6伝統や知名度がある	33.5	43.8	-10.2
7校風やキャンパスの雰囲気が良い	40.2	46.0	-5.8
8就職のための支援が充実している	16.7	40.1	-23.4
9大学院が設置されている	10.0	8.0	2.0
10施設・設備が良い	31.7	27.9	3.8
11自宅から通える	46.3	60.7	-14.4
12大都市にある	11.5	17.4	-5.9
13自分の入りたいクラブ・サークルがある。	6.3	4.7	1.6
14授業料が安い	35.7	19.9	15.8
15奨学金制度が充実している	5.1	3.2	1.9
16親元を離れられる	14.4	9.2	5.2
17資格免許が取れる	50.2	57.7	-7.5

(注1) 表は「あてはまる」として○をつけた人の割合を表している

(表 1-6 特に重視したこと)

Q「上の質問で○をつけたものの中で、特に重視したことは何ですか」3つまで選び記入。

	共学女子	別学女子	共学-別学
	%	%	%
1入試の難易度があっている	33.0	27.1	5.9
2入試科目・選抜方法があっている	28.1	29.1	-1.0
3専攻したい学問分野がある	63.9	66.7	-2.8
4有名な教員、優秀な教員がいる。	3.0	1.5	1.5
5総合大学である	10.0	0.8	9.2
6伝統や知名度がある	13.6	16.9	-3.3
7校風やキャンパスの雰囲気が良い	17.5	19.4	-2.0
8就職のための支援が充実している	4.9	16.9	-12.0
9大学院が設置されている	2.1	2.5	-0.4
10施設・設備が良い	10.8	6.0	4.8
11自宅から通える	33.5	39.6	-6.1
12大都市にある	3.5	5.5	-2.0
13自分の入りたいクラブ・サークルがある。	1.9	1.7	0.2
14授業料が安い	18.9	9.5	9.4
15奨学金制度が充実している	1.2	0.0	1.2
16親元を離れられる	6.5	4.5	2.0
17資格免許が取れる	34.8	40.8	-6.0

(表 2-1 大学生生活の満足度)

Q「あなたは、現在通っている大学や学部・学科について満足していますか。」

(注:1 とても満足している 2 まあ満足している 3 あまり満足していない 4 ぜんぜん満足していない 5 判断できない 6 無答不明)

(A) 施設・設備などについて	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学	大小	別学
1 研究や実験のための設備	75.6	68.7	6.9	2.41	<	2.52
2 パソコンなどの情報設備	76.0	78.5	-2.5	2.02	>	1.98
3 図書館の使いやすさ	67.4	67.1	0.3	2.23	<	2.25
4 キャンパスの場所(立地)	52.9	59.2	-6.3	2.49	>	2.36
5 大学の規模	71.7	61.8	9.9	2.19	<	2.45
6 総合	74.9	69.1	5.8	2.18	<	2.22
(B) 進路支援体制について	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学	大小	別学
1 将来の仕事に役立つ授業	62.7	68.0	-5.3	2.55	>	2.44
2 進路・就職相談(カウンセリング)	49.0	59.7	-10.7	3.25	>	2.96
3 就職支援プログラム	52.8	64.8	-12.0	3.33	>	2.93
4 資格・免許取得の支援	57.6	69.4	-11.8	2.89	>	2.51
5 インターンシップの機会	48.2	50.2	-2.0	3.71	>	3.56
6 総合	53.0	63.8	-10.8	3.01	>	2.65
(C) 授業・教育システムについて	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学	大小	別学
1 一般教養科目の授業	62.2	72.2	-10.0	2.39	>	2.25
2 専門科目の授業	81.2	83.0	-1.8	2.01	>	1.92
3 外国語教育の授業	53.9	52.3	1.6	2.52	<	2.56
4 実践的な授業	72.5	66.3	6.2	2.56	<	2.60
5 選択できる講義数の多さ	58.9	56.1	2.8	2.47	<	2.49
6 総合	70.6	71.8	-1.2	2.25	>	2.23
(D) 教員について	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学	大小	別学
1 学問分野の専門家としての教員のレベル	82.0	84.6	-2.6	2.03	>	1.94
2 授業のわかりやすさ	53.5	63.3	-9.8	2.52	>	2.31
3 一人一人の関心に応じた指導	32.2	46.3	-14.1	2.94	>	2.65
4 教員とのコミュニケーションの機会	50.3	60.0	-9.7	2.60	>	2.36
5 教員の人的魅力	62.7	66.7	-4.0	2.42	>	2.34
6 総合	59.7	66.1	-6.4	2.42	>	2.27
(E) 大学生生活全般について	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学	大小	別学
1 クラブやサークルの充実度	67.1	48.7	18.4	2.56	<	2.98
2 友人関係	87.6	86.8	0.8	1.74	>	1.73
3 学生生活支援の充実度	74.2	70.4	3.8	2.88	<	3.03
4 大学の伝統や校風	77.8	79.1	-1.3	2.28	>	2.08
5 総合	83.3	79.0	4.3	2.01	<	2.06

(注1) 共学、別学の%は「1 とても満足している」「2 まあ満足している」の合計比率を示したもの

(注2) 平均値については値が小さいほど「満足している」ことを表している。

(注3) 選択肢にある「5 判断できない」については、欠損値として扱った。よって、母数は「5 判断できない」を除いた標本数となっている。

(表 2-2 大学のギャップ)

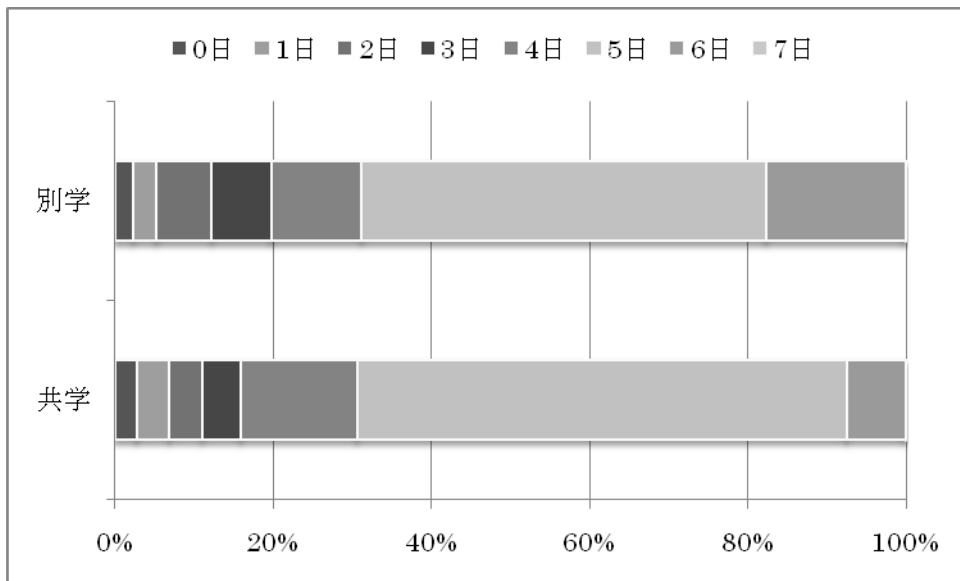
Q「入学前に得た大学に関する情報と実際の大学にギャップを感じることはありますか」

(注：1 よくある 2 時々ある 3 どちらともいえない 4 あまりない 5 ぜんぜんない)

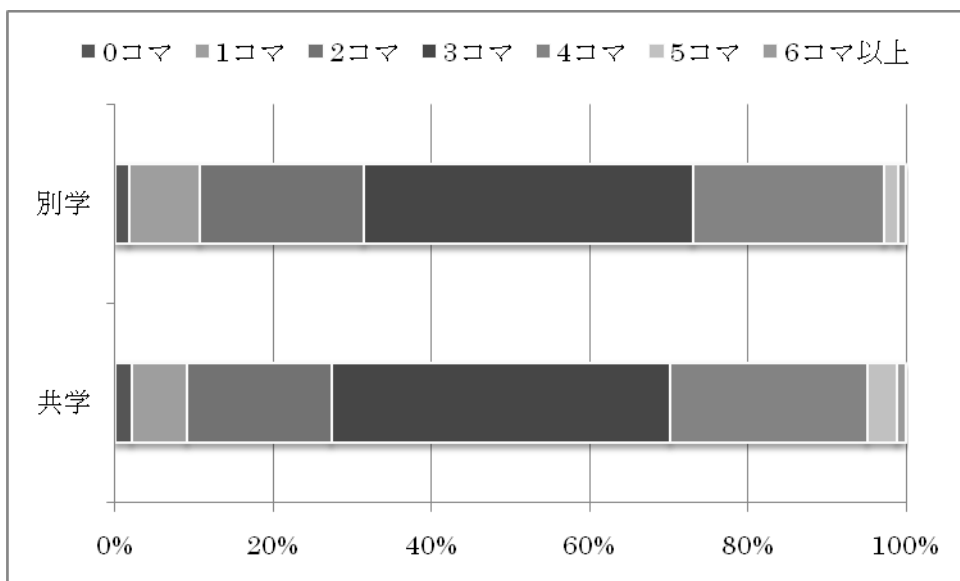
共学	別学	共学-別学	平均値		
			共学女子	大小	別学女子
%	%	%			
50.6	57.6	-7.0	2.69	>	2.57

(注 1) 平均値の小さい方が「ギャップを感じることもある」

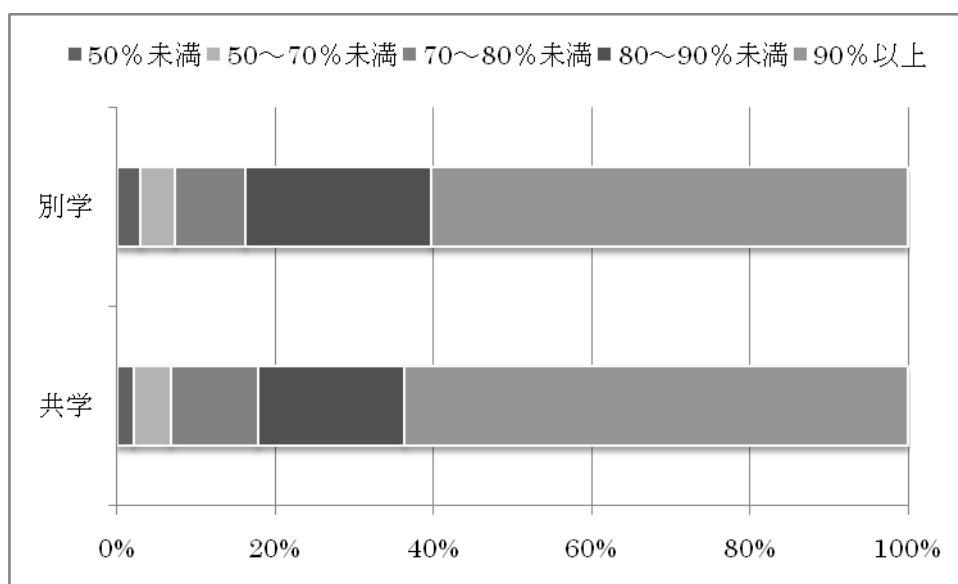
(グラフ 2-3 大学の1週間あたりの授業日数)



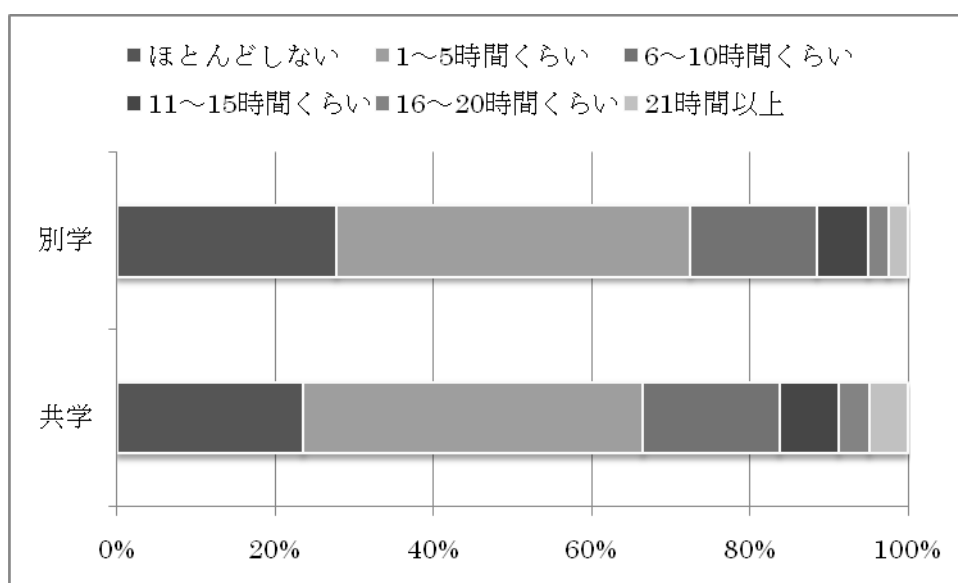
(グラフ 2-4 1日あたりのコマ数)



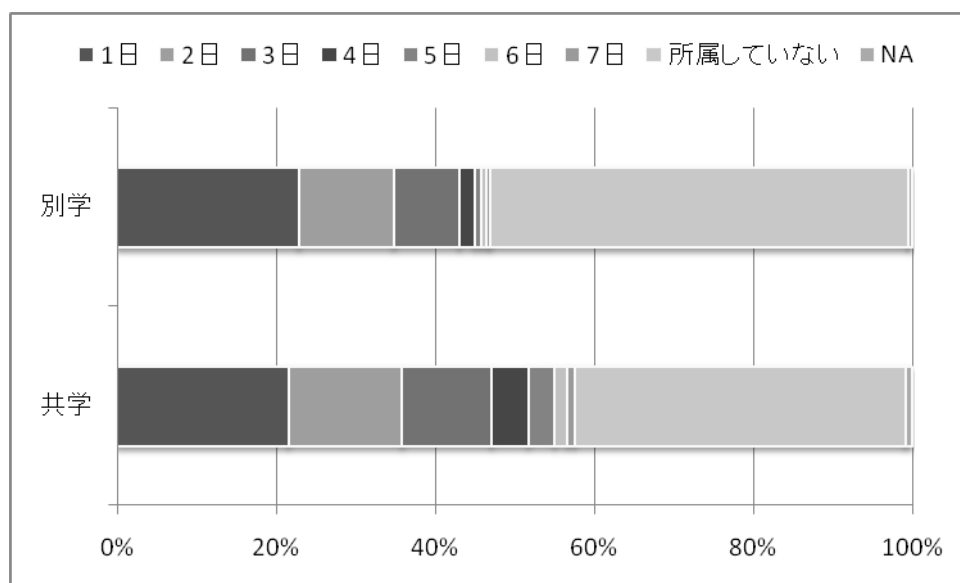
(グラフ 2-5 授業の平均出席率)



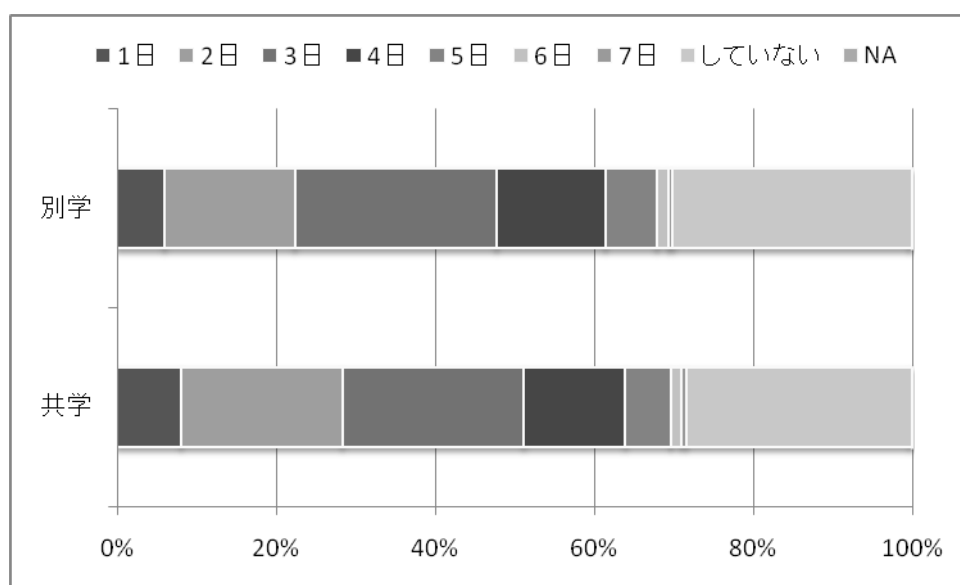
(グラフ 2-6 大学の授業以外での勉強)



(グラフ 2-7 クラブやサークル活動の週あたりの参加時間)



(グラフ 2-8 アルバイトに行く週あたり平均日数)



(表 2-9 平均値)

	平均値		
	共学	大小	別学
1大学の授業は1週間のうちで何日くらいありますか	5.41	<	5.47
2授業がある日は、平均して何コマくらい出席していますか	3.97	>	3.87
3平均すると出席率は何%くらいになりますか	4.37	>	4.34
4大学の授業以外で、1週間に平均して何時間くらい勉強していますか	2.40	>	2.19
5クラブやサークルの活動には、1週間に平均して何日くらい参加していますか	2.34	>	1.94
6アルバイトには、1週間に平均して何日くらい行っていますか	2.92	<	3.07

(注1) 5と6については「8 所属していない」「8 していない」を除いたものの平均値。

(表 3-1 就職先を決める時重視すること)

Q「あなたは就職先を決める時、次のようなことをどの程度重視しますか」当てはまる番号に○をつける。

(注： 1 とても重視する 2 まあ重視する 3 あまり重視しない 4 全然重視しない)

	共学	別学	共学-別学	平均値		
	%	%	%	共学	大小	別学
1自分の能力や個性が活かせること	97.1	96.0	1.1	1.44	>	1.41
2学生時代に身につけた知識や技術が活かせること	86.0	83.3	2.7	1.69	<	1.76
3給料が高いこと	76.4	75.1	1.3	2.07	<	2.11
4休みが多いこと	58.9	58.4	0.5	2.35	>	2.34
5仕事を通して資格や技術を身につけられること	71.9	71.5	0.4	2.03	<	2.05
6地理的条件がよいこと	76.8	78.6	-1.8	2.02	>	1.96
7知名度がある会社であること	40.2	44.4	-4.2	2.67	>	2.59
8安定していること	89.2	89.0	0.2	1.73	>	1.72
9人や社会の役に立つこと	81.8	78.1	3.7	1.81	<	1.88
10人と接する機会が多いこと	63.7	64.6	-0.9	2.16	>	2.10
11国際的に働けること	29.6	27.4	2.2	2.90	<	2.96
12将来、独立して事業ができること	13.2	13.2	0.0	3.30	>	3.27

(注1) 共学、別学の％は「1 とても重視する」「2 まあ重視する」をつけた人の割合を示している。

(注2) 平均値は小さい方が重視している度が高い。

(表 4-1 設置場所別大学数 (女子大・全体))

	女子大学 (数と割合)		全私立国公立	
	数	割合	数	割合
23区	15	17.9%	132	17.5%
東京都下	9	10.7%		
関東甲信越	12	14.3%	146	19.3%
中部	7	8.3%	95	12.6%
関西	18	21.4%	157	20.8%
中四国	10	11.9%	67	8.9%
九州・沖縄	8	9.5%	78	10.3%
北海道・東北	5	6.0%	81	10.7%
総合計	84	100.0%	756	100.0%

(注1) 女子大学については個人的に集計を行った

(注2) 全私立国公立については総務省統計局「日本の統計 2009」、第22章教育より集計

<回帰分析結果>

(表 1'-1)

どのような学生が女子大学へ進学をするのか		
dependent variable:別学大女子か共学大女子か		
independent variable	①多重回帰	②単回帰
<親とのかかわり>	-0.01097	-0.01870
勉強を教えてもらう	0.00646	0.00575
<親とのかかわり>	-0.00014	-0.00153
以後や将棋を教えてもらう	0.00656	0.00624
<親とのかかわり>	0.00935	0.00242
家の修理や日曜大工をする	0.00644	0.00572
<親とのかかわり>	-0.00255	-0.01004
本や絵本を読んでもらう	0.00587	0.00524
<親とのかかわり>	-0.01157	-0.01799
夏休みの自由研究を一緒にしたり手伝ってもらう	0.00649	0.00594
<親とのかかわり>	-0.00133	-0.00472
キャンプなどで野外で遊ぶ	0.00577	0.00525
<親とのかかわり>	-0.00247	-0.00243
親が働いている職場に行く	0.00522	0.00506
<親とのかかわり>	0.00082	-0.01321
学校の出来事について話す	0.01320	0.00874
<親とのかかわり>	-0.00190	-0.02069
勉強や成績について話す	0.01034	0.00648
<親とのかかわり>	-0.02150	-0.02459
将来や進路について話す	0.00856	0.00648
<親とのかかわり>	0.00449	-0.01240
友達について話す	0.01155	0.00787
<親とのかかわり>	0.00195	-0.00891
社会の出来事やニュースについて話す	0.00730	0.00622

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 ①は項目全てを説明変数に入れて多重回帰分析したもの、②は項目それぞれについて単回帰分析したものの

※3 回帰係数がマイナスだと、別学女子の方がより関わりが強くなるということを表す。

※4 網掛けは有意な値であることを示す (以下全て同じ)

(表 1'-2)

どのような学生が女子大学へ進学をするのか dependent variable:別学大女子か共学大女子か		
independent variable	①多重回帰	②多重回帰
〈進路相談の参考度〉 父	-0.00229 0.00428	-0.00229 0.00434
〈進路相談の参考度〉 母	-0.01453 0.00580	-0.01597 0.00598
〈進路相談の参考度〉 きょうだい	0.00106 0.00412	0.00254 0.00422
〈進路相談の参考度〉 学校の友達		-0.00043 0.00542
〈進路相談の参考度〉 学校外の友達		-0.01320 0.00468
〈進路相談の参考度〉 部活などの先輩		0.00395 0.00438
〈進路相談の参考度〉 高校の先輩		0.01020 0.00519
〈進路相談の参考度〉 塾や予備校の先生		-0.00260 0.00356
〈進路相談の参考度〉 年長の知人		0.00127 0.00397

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 ①は父、母、きょうだいを説明変数として回帰分析したもの、②はすべての変数を説明変数として回帰分析したもの。

※3 回帰係数がマイナスだと、別学女子の方がより参考度が高いということを表す。

(表 1'-3)

どのような学生が女子大学へ進学をするのか dependent variable:別学大女子か共学大女子か	
independent variable	単回帰
小・中学生のころ	0.01026
クラスのリーダー格だった	0.00531

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

(表 1'-4)

大学へ進学する理由		
dependent variable:別学大女子か共学大女子か		
independent variable	①多重回帰	②単回帰
大卒の学歴がほしい	0.00207	-0.00405
	0.00599	0.00539
専門的な研究がしたい	-0.00919	0.00335
	0.00657	0.00608
幅広い教養を身につけたい	0.00245	-0.00354
	0.00660	0.00610
資格や免許を取得したいから	-0.02471	-0.00890
	0.00606	0.00528
将来の仕事に役立つ勉強がしたいから	0.02944	0.02214
	0.00762	0.00645
自由な時間を得たいから	0.00416	-0.00720
	0.00625	0.00520
すぐに社会に出るのが不安だから	-0.00627	-0.01132
	0.00620	0.00487
先生や家族が勧めるから	-0.00269	-0.00467
	0.00631	0.00497
周囲の人がみな行くから	0.00107	-0.00305
	0.00653	0.00489
文系志望か理系志望か	-0.02346	
	0.00333	

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 ①は項目全てを説明変数に入れて多重回帰分析したもの、②は項目それぞれについて単回帰分析したものの

※3 回帰係数がマイナスだと、別学女子の方がより重視していることを表す。

(表 1'5)

現大学へ進学した理由	
dependent variable:進学先(女子大・共学大)	
independent variable	①多重回帰
入試の難易度があっている	-0.00134 0.00896
入試科目・選抜方法があっている	-0.00697 0.00912
専攻したい学問分野がある	0.00998 0.01092
有名な教員、優秀な教員がいる	-0.02456 0.01292
総合大学である	-0.10964 0.03473
伝統や知名度がある	0.03473 0.01036
校風やキャンパスの雰囲気がよい	0.00617 0.00947
就職のための支援が充実している	0.10706 0.01591
大学院が設置されている	0.00039 0.01527
施設・設備がよい	-0.03672 0.00867
自宅から通える	0.02733 0.00936
大都市にある	0.05805 0.01780
自分の入りたいクラブ・サークルがある	-0.01701 0.01589
授業料が安い	-0.02961 0.00886
奨学金制度が充実している	-0.03396 0.01418
親元を離れられる	-0.01637 0.01314
資格・免許がとれる	0.02347 0.00882
文系志望か理系か	-0.01473 0.00273

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 ①は項目全てを説明変数に入れて多重回帰分析し、②は項目それぞれについて単回帰分析したもの

※3 回帰係数がプラスだと、別学女子の方が重視していることを表す。

(表 1'6)

進学理由(多重回帰)	
dependent variable: 進学先(女子大・共学大)	
independent variable	
進路相談の参考度:父	-0.00157 0.00349
母	-0.00595 0.00482
きょうだい	0.00085 0.00340
学校の友達	0.00016 0.00434
学校外の友達	-0.00837 0.00380
部活などの先輩	0.00330 0.00354
高校の先輩	0.00316 0.00421
塾や予備校の先生	0.00016 0.00287
年長の知人	0.00067 0.00324
進学時重視したこと: 入試の難易度があっている	-0.00122 0.00901
入試科目・選抜方法があっている	-0.00628 0.00914
選考したい学問分野がある	0.00886 0.01110
有名な教員、優秀な教員がいる	-0.02250 0.01322
総合大学である	-0.11082 0.00731
伝統や知名度がある	0.03316 0.01040
校風やキャンパスの雰囲気がよい	0.00503 0.00948
就職のための支援が充実している	0.10719 0.01624
大学院が設置されている	0.00059 0.01537
施設・設備がよい	-0.03676 0.00870
自宅から通える	0.02803 0.00948
大都市にある	0.05782 0.01797
自分の入りたいクラブ・サークルがある	-0.01373 0.01654
授業料が安い	-0.02704 0.00895
奨学金制度が充実している	-0.03436 0.01395
親元を離れられる	-0.01522 0.01341
資格・免許が取れる	0.02170 0.00888
文系志望か理系志望か	-0.01455 0.00277

(表 2'-1)

independent variable	dependent variable: 満足度					
	施設・設備	進路支援体制	授業・教育システム	教員	大学生活全般	ギャップ
女子大か共学大か (女子大1、共学大0)	0.16914	-0.18573	-0.046827	-0.16581	0.07198	-0.13049
	0.06204	0.06517	0.062293	0.06057	0.06179	0.05826
大学設置元(国公立 が1、私立が0)	-0.15248	-0.25029	-0.051359	-0.00207	0.03016	0.00937
	0.02160	0.02370	0.021453	0.02097	0.02149	0.01602
大学のランク	0.01261	0.13297	0.008548	-0.08568	-0.01297	-0.01425
	0.01719	0.01893	0.017169	0.01681	0.01717	0.02004
文系か理系か	-0.00255	-0.02167	-0.018349	0.02943	0.01021	-0.00777
	0.00968	0.01047	0.009673	0.00946	0.00966	0.00902

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 ①は項目全てを説明変数に入れて多重回帰分析したもの、②は項目それぞれについて単回帰分析したもの

※3 回帰係数がマイナスだと、別学女子の方がより関わりが強くなるということを表す。

(表 2'-2)

independent variable	dependent variable: 普段の生活					
	1週間の授業日数	1日の出席コマ数	授業の出席率	1週間の勉強時間	1週間のクラブ・サークル活動	1週間のアルバイト日数
女子大か共学大か (女子大1、共学大0)	0.12391	-0.05162	0.01463	-0.03432	-0.29496	0.05938
	0.06066	0.05793	0.06526	0.05945	0.08789	0.06827
大学設置元(国公立 が1、私立が0)	0.27268	0.12408	-0.00104	-0.02572	-0.02722	-0.21865
	0.04227	0.03978	0.04583	0.04022	0.05315	0.04720
大学のランク	0.00748	-0.03249	0.00260	-0.12508	-0.04736	0.14160
	0.01745	0.01659	0.01889	0.01694	0.02289	0.01997
文系か理系か	0.09616	0.12357	0.13017	0.07298	-0.04439	-0.05819
	0.01186	0.01135	0.01280	0.01141	0.01527	0.01320

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 回帰係数がプラスだと、別学女子の方がより多いことを表す。

(表 3'-1)

dependent variable: 就職先決定の重視点						
independent variable	1.自分の能力や個性が生かせること	2.学生時代身につけた知識や技術が生かせること	3.給料が高いこと	4.休みが多いこと	5.仕事を通して資格や技術を身につけられること	6.地理的条件がよいこと
女子大か共学大か	-0.04628 0.06736	0.01743 0.06198	0.02428 0.06129	-0.01725 0.06027	-0.01628 0.06002	-0.04496 0.06047
大学設置元	0.00404 0.04245	0.02258 0.03992	-0.02837 0.03901	-0.05948 0.03833	0.06942 0.03814	0.14364 0.03837
大学のランク	0.02038 0.04914	0.16811 0.01749	0.17258 0.01711	0.01062 0.01663	-0.05859 0.01660	-0.03582 0.01666
文系か理系か	0.02451 0.01295	-0.14947 0.01218	-0.02457 0.01186	0.02266 0.01166	-0.05258 0.01161	-0.00880 0.01166

dependent variable: 就職先決定の重視点						
independent variable	7.知名度がある会社であること	8.安定していること	9.人や社会の役に立つこと	10.人と接する機会が多いこと	11.国際的に働けること	12.将来、独立して事業ができること
女子大か共学大か	-0.03908 0.05935	-0.02621 0.06273	0.05558 0.06068	-0.05011 0.05963	0.11305 0.05991	-0.03072 0.06185
大学設置元	0.15663 0.03779	0.03503 0.03974	-0.02793 0.03882	-0.06869 0.03776	-0.07386 0.03805	0.08095 0.03969
大学のランク	0.06722 0.01640	0.16765 0.01736	-0.00991 0.01687	-0.03629 0.01641	0.13420 0.01661	0.09653 0.01723
文系か理系か	0.03772 0.01149	-0.01312 0.01208	-0.01884 0.01176	0.07769 0.01150	0.13043 0.01165	0.02762 0.01205

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 回帰係数がマイナスだと、別学女子の方がより重視していることを表す。

(表 3'-2)

dependent variable: 就職先決定の重視点						
independent variable	1.自分の能力や個性が生かせること	2.学生時代身につけた知識や技術が生かせること	3.給料が高いこと	4.休みが多いこと	5.仕事を通して資格や技術を身につけられること	6.地理的条件がよいこと
女子大か共学大か	-0.06262 0.06474	0.10103 0.05918	0.05673 0.05865	-0.01303 0.05789	0.01374 0.05754	-0.09171 0.05805

dependent variable: 就職先決定の重視点						
independent variable	7.知名度がある会社であること	8.安定していること	9.人や社会の役に立つこと	10.人と接する機会が多いこと	11.国際的に働けること	12.将来、独立して事業ができること
女子大か共学大か	-0.11134 0.05694	-0.02944 0.05993	0.08975 0.05825	-0.06934 0.05725	0.07073 0.05743	-0.04801 0.05939

※1 上段が回帰係数、下段が standard error

※2 回帰係数がマイナスだと、別学女子の方がより重視していることを表す。

(表 3'-3)

dependent variable : 就職先決定の重視点		
independdent variable	7.知名度がある会社で あること	11.国際的に働けること
女子大か共学大か	-0.11117	0.06960
	0.05697	0.05747
大学のランク	0.06612	0.13309
	0.01612	0.01628